

2020年6月24日

【オンラインでボランティア指導再開！】コロナ禍を受け、介助犬の子犬育成プログラム

手や足に障がいがある方の日常生活をサポートする介助犬を育成する社会福祉法人日本介助犬協会（以下、協会）は、コロナ禍を受けボランティア指導をオンラインで実施、6月22日（月）に行われた様子をレポートする。協会は感染拡大予防対策を実行しながら介助犬育成を着実に進めている。

協会は介助犬候補のパピー（子犬）を2か月齢から1歳頃までパピーホームボランティアと呼ぶ一般のご家庭に預けている。通常は協会の職員が定期的にボランティア宅に伺い、パピーの様子を伺う「訪問指導」の他、月に一度介助犬総合訓練センター（愛知県長久手市）にボランティアを集め「来訪デイ」と称した、職員によるしつけ方教室を開催している。しかし今般の新型コロナウイルスの感染拡大を受け、4月以降は訪問や来訪による指導を中止せざるを得ず、個別で電話やビデオ通話による状況確認や個別指導を行ってきた。犬の幼少期は時期によって飼育者であるボランティアが抱える悩みが共通することも多く、こうした悩みをボランティア同士が共有する場としてもこれまで行ってきた「来訪デイ」は重要な位置づけを持つ。



従来の「来訪デイ」の様子

コロナ禍で介助犬育成の手を止めないため、協会はボランティア指導を初めてオンラインで実施、6月22日に行われた「オンライン来訪デイ」の様子をレポートする。

この日参加したのは7か月齢から1歳のパピーを預かるボランティア7家族。各家庭がパソコンやスマホを通じてアクセスをし、職員が画面の前でその月齢に合わせた指導を行う。この日行われたのは簡単なトレーニング。トレーニングとは言

っても決して厳しく教えるわけではなく、遊びを通じて人とのコミュニケーションややり取りを楽しみながら、例えば一つの動きを人と犬で作りに上げていくものである。

この日は人の足の間を8の字の形で回る、という動きを少しずつ教えていった。職員がトリーツ（ご褒美のおやつ）を持ちながらお手本の動作を行い、ボランティアがそれを画面で見ながら同じようにそれぞれ行う。簡単な動作から始めて、徐々に難易度を上げていく。パピーたちの集中力は長く持たないため、いかに楽しませながら、遊びを通じてトレーニングを行っていくかがポイントである。褒めるタイミングやご褒美のタイミングを伝えながら、犬にとっても何が正解なのか、遊びながら伝えていく。職員が画面上でそれぞれのボランティアが行っている様子を確認し、徐々に動きを完成させていく。中には途中で退屈してしまい座り込む犬や、反対にやる気に満ち溢れてどんどん動きを覚えていく犬もいる。



「オンライン来訪デイ」の様子

これから梅雨や夏の暑さで、犬が外に出られる時間も限られていく中、この日行ったような、限られたスペースでも人も犬も楽しみながら時間を過ごすことができる遊び方を伝えていくことで、快適にお家で過ごすヒントとなるだろう。40分の「来訪デイ」はあっという間に終了した。協会の訓練部職員は「今、この状況でできることは精一杯できたと感じる。思っていたよりこちらからボランティアさんの様子も拝見することができ、今後の指導にも役立てていきたい」と話す。参加者からは「とても楽しかった。予想以上に映

像も音声もクリアで、指導も分かりやすく、快適に参加できた。」という感想も寄せられた。

今後いつまで続くかわからないコロナ禍の中で、介助犬育成も形を変えて、今できることを考えながら行っていく。

パピーホームボランティア（長久手市近郊に限る）に興味を持った方は協会に問い合わせを。
(TEL0561-64-1277/ <https://s-dog.jp>)

※この時期には介助犬特有の訓練よりも、人と過ごす楽しさや人を好きになってもらうことに重きを置き、それぞれの家庭で楽しく過ごすことを目指している。人と一緒に何かすることが楽しい、という将来介助犬になる時に大事な要素がパピー時代に経験できるよう、遊びの一環としてトレーニングを行っている。